

## 巻頭言

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会  
第8期ゼミ長 荻野真央

ここに一冊の論文集がある。その名を『慶應マーケティング論究』という。この論文集の内容を一言で表すならば、文字通り、慶應義塾大学商学部小野晃典研究会に所属する僕達8期生が、マーケティング論を究めるべく綴った論文の数々である。マーケティングを学んで間もない身分ではあるが、マーケティング研究に没頭し、心から楽しんだ僕達の学究生活のすべてが、ここに記されている。以下、この論文集に込められた意義と想いについて、ほんのわずかではあるが、記そうと思う。

「勉学と自己の成長に対し熱意を持ち、仲間と協力して主体的に活動できる学生」——これは、8期生の入ゼミに際して、第7期の先輩方が掲げた「求める人物像」である。勉学に励んだ者、サークル活動やアルバイトに打ち込んだ者、自堕落な生活を送ってきた者…十人十色の日吉時代を送ってきた13名が、小野晃典研究会の門を叩き、この像のもとに、8期生として迎え入れられた。共通点のほとんどない者達が、奇しくも、『成長』を求めるという点で意を同じくし、一堂に会したのである。

入会を前にして、僕達が思い描いていた『成長』のビジョンはどのようなものであったろうか。「論理的思考能力の向上」、「プレゼン能力の向上」、「タイム・マネジメント能力の向上」…これもまた、十人十色であったに違いない。僕達は、各々が思い描く「理想の自分」と「実際の自分」の差を埋めるべく、この研究会をツールとして選び、身を投じ、三田での生活をゼミ活動に捧げることを誓ったのである。

入会后、僕達は、多くの課題を自らに課し、がむしゃらにそれらに打ち込んだ。多くの基礎文献を読み漁り、多変量解析技法を学び、マーケティングの知識をゼロから身につけた。ケース・メソッドやディベート、データ解析を行い、その数を重ねることで、それらの応用法を身につけた。三田祭論文・卒業論文執筆活動では、そうした応用法をもとに、一介の学生ながら、独自の論理と情熱を武器に、全世界の著名なマーケター達と肩を並べようと、既存の理論に代わる、新たな理論の構築を試みた。いつしか僕達は、マーケティングという学問に魅了され、その研究に、寝食を忘れるほどに没頭していった。

2年間という月日は、僕達に「成長したのだろうか」と自問自答する暇も与えず、研究に没頭する僕達の間を、吹き抜けるように流れていってしまった。果たして、僕達は『成長』したのだろうか。

卒業を前にした今、僕達はきっと、2年前の自分達と大きくかけ離れているであろう。僕達は、実に多くのことを学んだ。己が無知を学んだ。正解のない問題を解く楽しさを学んだ。物事に対して疑問を抱き、その問題点を克服する活路を見出そうとする精神を学んだ。仲間との「成功の共創」の偉大さを学んだ。成し遂げた後の酒の、何と美味たるかを学んだ。ゼミ活動を経て、僕達が学んだものは、枚挙に暇がない。マーケティングの知識やノウハウはもちろんのこと、それを得る過程での幾千もの苦楽と感動は、まぎれもなく、僕達の血肉となり、かけがえのない財産となったのである。

当初思い描いていた「理想の自分」と「実際の自分」の差——それを埋めることが『成長』なのだとしたら、僕達は『成長』を超えて余りある、『奇跡』のようなものを経験したのであろう。そして、マーケテ

ィングという大いなる学問に出会い、魅了されてきた僕達の、2年間の『奇跡』の軌跡こそが、この論文集なのである。読者諸兄には、刮目を請いたい。

末筆ながら、本論文集を執筆・編纂するにあたり、お世話になった方々へ、深謝の言葉を綴りたい。

まず、同研究会第9期の後輩の皆へ。教育とは面白いもので、教えることで己が無知を知り、また学びたくなるものである。僕達8期生に絶え間なく勉学の道を歩ませ、この論文集の執筆を後押ししてくれたのは、僕達を慕い、応援してくれた、愛しい後輩の存在であった。ありがとう。

そして、同研究会第7期の先輩の皆様へ。右も左もわからなかった僕達に、常に親身なご指導をしてくださった。僕達を気にかけてくださり、叱咤激励してくださった先輩方のご厚意は、僕達の知識と知恵となり、この論文集の血肉となった。ありがとうございました。

さらに、慶應義塾大学大学院博士課程の千葉貴宏さん、同修士課程の池谷真剛さん、窪田和基さん、パクンジュンさん、菊盛真衣さん、白石秀壽さん、高路さん、朱彦さん、魏敏さんへ。この論文集が完成の日を迎えたのは、僕達が大学生として最高学年になってもなお、親身なご指導をしていただける先輩方の存在が身近にあったからである。ありがとうございました。

そして、家族の皆へ。この論文集を執筆することができたのは、金銭的にも心理的にも僕達を陰で支えてくれた、他ならぬ家族の応援があったからこそである。研究に没頭するあまり、帰宅が遅くなったり、連絡無精になりがちであった僕達への理解と協力に、心からの感謝の意を綴りたい。本当にありがとう。

最後に、慶應義塾大学商学部教授の小野晃典先生へ。赤子同然であった僕達を、ご自身の都合も省みず、教え、育み、愛してくださった。あるときは父のように、僕達を叱り、導いてくださった。あるときは母のように、僕達を支え、励ましてくださった。あるときは友のように、共に研究に没頭し、その楽しみを分かち合ってくださった。小野先生は僕達にとって、良き指導者であり、良き理解者であり、かけがえない恩師である。僕達の『奇跡』は、小野先生から賜った学恩なくしては起こり得なかったであろう。筆舌に尽くし難いが、ここに最大級の感謝の意を綴りたい。本当に、ありがとうございました。

僕達の『奇跡』は、もとよりこの論文集に終わるものではない。この2年間で得た財産をもとに、今後もさらなる高みを目指すことを、8期生一同に代わり、ここに誓ったところで、筆を置くことにする。

2012年2月吉日